

氏 名 角田 佳子
学位の種類 博士 (医学)
学位記番号 甲第383号
学位授与年月日 平成24年6月26日
審査委員 主査 教授 熊倉 俊一
副査 教授 原田 守
副査 教授 堀口 淳

論文審査の結果の要旨

神経ベーチェット病 (Neuro-Behçet's disease, NBD) は、ベーチェット病患者の約10%に認められる病態で、髄膜炎様症状等を呈する急性型と認知力低下や精神症状などが遷延する慢性進行型に分類される。NBDの発症原因は不明であるものの、遺伝的素因に加え、何らかの外的要因によるリンパ球や好中球の機能亢進が関与することが示唆されている。本研究では、NBDの病態形成におけるB cell activating factor belonging to TNF family (BAFF)の関与の可能性に着目し、髄液及び血清中のBAFF及びinterleukin-6 (IL-6) とNBDとの関連について詳細な研究を行い、以下の事実を示した。

- 1) NBD及び無菌性髄膜炎 (Aseptic meningitis, AM)、多発性硬化症 (Multiple sclerosis, MS) 患者群、健常人対照における髄液BAFF及びIL-6をenzyme linked immunosorbent assay法にて定量し、NBD患者の髄液BAFFは、健常人対照に対して有意に高値であることを示した。また、髄液IL-6については、NBD、AM及びMS患者のいずれも高値を呈することを示した。
- 2) NBD患者の血清BAFFの解析からは、健常人対照と差はなく、このことより、髄液におけるBAFFの高値がNBDの特徴であることを示唆した。また、NBD患者の髄液BAFFと血清BAFF、髄液細胞数及びIL-6に相関は認められないことを示した。
- 3) NBD患者の髄液BAFFを急性型及び慢性進行型で比べると、慢性進行型において有意に高値を呈することを明らかにし、病型との関連を示した。

本研究は、NBDの病態形成におけるBAFFの関与を明らかにし、難治性疾患としての本疾患の今後の病因解明へ向けた新しい方向性並びに治療への応用の可能性を示した研究と考えられる。